

題目 偏狭な利他主義者の存在とその印象

氏名 尾添光太郎

指導教員 高橋伸幸

私たち人間の社会では、互いに利害の一致していない人々が、個々人の利益を犠牲にして他者の利益になるような行動、利他行動をとっている。さまざまな人間の利他行動の仕組みを説明する仮説が唱えられている中で、注目されているのが強い互惠性仮説(Bowles & Gintis, 2011; Fehr, Fischbacher, & Gächter, 2002)である。強い互惠性とは、通常の互惠性(協力には協力を、非協力には非協力を返す)に加えて、自ら損失を被ってでも非協力者に罰を与えることを指す。この強い互惠性仮説では、協力行動と罰行動との間に連動が存在することが想定されている。さらに、強い互惠性仮説論者は、罰行動に加え、利他性は偏狭さ(内集団に対しては外集団に対してよりも協力する)、及び外集団に対する攻撃行動とも連動していると主張している(e.g., Bowles & Gintis, 2011)。彼らは、このような内集団への協力性と外集団への攻撃性を合わせて、「偏狭な利他主義」と呼んでいる。しかし、このような連動は実際に見られるのだろうか。協力的な人間は罰行動を取る傾向が強いという強い互惠性仮説の予測するような相関については、これまで一貫した実験結果が示されていない(李・山岸, 2014; Yamagishi et al., 2012)。また、人間が偏狭な利他主義であるという考えを積極的に支持する証拠は少ない。逆に、人間が偏狭な利他主義であることを示す、偏狭さと利他性が個人内で相関しているという証拠も見つかっていない(Yamagishi & Mifune, 2016)。そこで本研究の目的は、協力行動と罰行動、偏狭さ、外集団攻撃性との連動が実際に見られるかを検証することで、強い互惠性仮説と偏狭な利他主義の妥当性を検討することとした。本研究では Qualtrics を用いて質問紙を作成し、調査を行った。4つのゲーム状況(公共財ゲーム、公共財ゲームの罰行使ステージ、内・外集団メンバーとの囚人のジレンマゲーム、IPD-MD)のそれぞれにおける参加者の行動の相関を検討することで、協力行動と罰行使、偏狭さ、外集団攻撃行動との間に連動が見られるかを確かめた。その結果、強い互惠性仮説と偏狭な利他主義が想定するような協力行動と罰行動、偏狭さ、外集団への攻撃行動との連動はほとんど見られず、唯一、偏狭さと外集団攻撃行動との間に非常に弱い連動が見られるだけだった。このような結果から、本研究では、強い互惠性仮説や偏狭な利他主義が想定しているような連動は実際にはほとんど見られないため、これらの仮説の妥当性は低い可能性が高いと結論づけた。